

相談場面における男性の特徴

坊隆史 松本健輔

前回は「北風と太陽」の寓話を用いて、男性の解決モードのあり方について考えた。男性は北風コミュニケーションになりがちであるが、援助場面では必ずしも北風モードの男性ばかりが来談するとは限らない。むしろその逆であることの方が多様な実感がある。

今回は、2つの事例を通して相談場面における悩める男性の特徴について考えたい。なお登場する事例は、本質を損なわない程度に改編している。

男性相談場面から見える語りのプロセス

<Case 1 太郎氏 50歳代 自営業>

- ①父が創業した会社を長男として受け継いで20年近くになる。規模は小さいながら順調に経営を続けてきた。
- ②ところがこの1年間で業界事情が変わり、急に売上が落ちた。相当な経営努力をしたがこのままでは倒産してしまう。心身が不調になって専門医を受診したが、処方された薬を飲んでも改善しない日が続いている。
- ③こんな状態なのに部下の前では平静を装っている。気丈にふるまっているが本音は出さずに孤独を感じている。取引先にもいい格好をしてしまい、売上が厳しいのに低価格で取引をしてしまう。あるいは逆に値上げを迫られた時に先方の要求に応じてしまう。
- ④幸いにも家族の理解はある。厳しい現状ながらも家族の支えはある。感謝している。しかしそれだけに経営者として行き詰っている自分が嫌になる・・・

Case 1 は時勢による経済的な厳しさに悩む男性の事例である。相談開始から①についてすぐに語り始めたものの、②の内容が語られるまでにずいぶん時間を要した。過去の輝かしい実績については語りやすいが、経営不振の現状、すなわち自分の弱みを語るには抵抗があったのだと推察された。それでも誠実に耳を傾けることを続けていけば少しずつ困りごとを語ってくれるようになる。

ここで注意すべきは②は事実モードの語りであるということだ。心身の不調もまた医学的事実である。太郎氏の内面はあまり語られていない。太郎氏の語りに合わせて傾聴を続けていくことで③の内容が語られるようになる。ここで初めて孤独感や体面を気にしすぎて経営面でも失敗してしまうといった太郎氏の心理的な苦悩が語られた。一般的に男性はなかなか内面を語ろうとしない傾向がある。序盤の表面的な話題に注目していれば主訴を見誤ってしまう。しかしじっくりと傾聴を重ね、クライアントの世界観にジョイニングをしていくことで、感情を交えた語りをしてくれるようになる。男性の語りを聴くコツはここにある。

③まで語る事ができれば④のように厳しい現状ながらポジティブな資源もあることが自然と語られるようになる。後は1回限り/継続か、経営面の課題に着目/心理的な苦悩に着目するかといったことをクライアントの要望や相談構造に沿いながら検討しつつ展開していけばよい。

Case 1 は1回限り一期一会の相談構造であった。そのため、率直な気持ちを語ってくれたことに感謝の意を伝え、“男だから”“長男だから”頑張らなければならないという男性ジェンダーの縛りについて解説をしたうえで、家族の支援などポジティブな資源にも目を向けるなどの助言をして終結となった。なお継続して相談したい場合や経営面での実際に関する相談窓口といった社会資源に関する情報提供も行っている。

<Case 2 次郎氏 40歳代 会社員>

⑤上司が自分の仕事の成果を認めてくれない。「専門外だからわからな

い」が上司の口癖だが、上司は部下の仕事を知っておく必要があるのではないか。

- ⑥ 今度大きなプロジェクトが始まる。それに立候補しようと思っているのだが今の上司だと反対されるかもしれない。どうしたらいいものだろうか。
- ⑦ (⑥について検討しているうちに) 実は妻との関係がよくない。ここ数年考え方が合わなくなってきた。自分が選んだ女性だから大切にしたいという気持ちはあるのだが、これ以上一緒にいることが自分たちにとって良いことなのか判断がつかなくなってきた・・・

Case 2 は仕事の話かと思いきや、主訴は夫婦関係だったという事例である。男性は仕事については語ることもプライベートな面については語りくい傾向がある。序盤に仕事の話が語られても、解決を焦るがゆえに仕事のことばかりに注目してしまえば、本当の主訴が語られることなく相談時間が終了してしまう。本事例では Case 1 と同じようにじっくり傾聴を続けているうちに⑥が語られた。

⑥の段階で上司への気持ち、努力しているのに報われない無念さが語られたため、当初筆者は⑥の内容こそが相談の場で語りたい主訴だと考えていた。しかし、文脈に沿わない流れで妻の話題に変わり、⑦が語られた。それから次郎氏は妻との関係についてばかり語り、上司のことは話題にあがらなくなった。どうやら次郎氏が語りたいテーマは妻への葛藤だったようだ。

筆者は相談場面で検討したい内容はどの話題であるかを次郎氏に尋ねた。回答は⑦であった。次郎氏曰く、いきなり家族のことは語りにくい、しかもどのような相談員であるかわからないので、仕事のことから切り出したとのことである。なかなか本音を語るができない男性らしい考え方である。その後、妻との関係について検討するセッションが数回継続して同意の上で終結となった。

男性の夫婦関係の葛藤についての相談援助の基本的な考え方は本連載の松本担当回で度々述べられているので参照頂きたい。

男性の特徴を理解する

2つの事例についてどのような印象を抱かれたであろうか。「男ってややこしい」、「だから男性の相談はのりにくい」と感じられた方がおられるかもしれない。こうした男性が相談場面で語ることの困難さを濱田（2008）は「ハードルの高さ」、「滑走路の長さ」、「孤独な世界」という3つの特徴で説明している。いずれの事例でもこれらの傾向が垣間見られている。とくにCase2の滑走路の長さは顕著である。

しかし、あまりにややこしいと考えてしまうと男性の援助が困難なものになってしまう。少し見方を変えれば「慎重さがある」、「不器用な存在である」と捉えることもできる。援助者の負担が減り、援助者自身も楽に相談にのることができるだろう。

こうした特徴は男性の一般的な傾向であると考えられるが絶対ではない。いきなり主訴を語り出す男性もいれば、滑走路から飛び立たない男性もいるであろう。ドメスティック・バイオレンス（DV）といった緊急性の高い相談内容の場合、第一声で強烈な負の感情表現を表出させてくることもあるであろう。しかし、さまざまなパターンはあるものの、上記で示したパターンは男性の相談場面で多く見られるパターンである。そのことを念頭に置くことは男性援助を考える上で大変有益なことだと考えている。

文献

濱田智崇 2008 男性がこころに抱えるものをどう扱か 上村
くにこ（編）暴力の発生と連鎖 人文書院